

教師いいなって思うけど、だけどやっぱり日本では教師は無理だよ、こんなブラックなのは無理だよって言って、何人ももう民間就職に決まっています、私のこの今回の4年生のお友達でも。何か、ほんともったいない日本って思って、何でもっと教育にお金を割いてあげなくて、ここまで頑張っていて、こうしたいって思っている人がいるのに、それをやっぱり諦めさせるほど劣悪な職場環境だったりするのは、『ちよっともったいなさすぎるよ、日本』って思っちゃうのがもう悔しい気持ちですよね。」

そもそもこの国の「教職の危機」への対応の仕方に違和感を覚えているという意見も少ない。たとえば、Mは次のように語っている。

「教職の問題、すごい広い、広くなっちゃうんですけど、やっぱり学校の制度、やっぱり今多いのが、免許持ってもならない人って結構多いじゃないですか。今なんか、文部科学省か何かが、すぐになれるようにしたりとかいろいろやってはいるじゃないですか。でも問題って僕そこじゃないと思ってて、学校の中が、結局、労働が悪いとか、そっちがメインでなる人が少なくなっているのに、なんか全然、根本的にズレてくから、内部を改善していかないと、教員ってどんどん人気なくなっていくって、やっぱり思います。」

教職がひとつの選択肢として位置づけられ、冷静に進路選択がなされること自体は悪いことではない。また、具体的な他者とかかわりながら自分の特徴に気づいていくこと自体も重要な学びであるに違いない。しかし、その気づきを促す場自体が教員の育ちにとって好ましからざる環境であったとすれば、本来的には教職に就いて充分持ち味を発揮できたはずであるにもかかわらず教職から自ら離れる離脱層がきわめて多く生み出されていることは本人のみならず社会にとって大きな損失となる。にもかかわらず、現場にはびこる個人化された能力主義は、この損失にさえ気づかないように人々を仕向けているのである。

教職の魅力は、長い時間をかけてじっくりかかわり、子どもたちの変化と応答を受けることができるというある種の「やりがい」に起因する(S)。「成長しつつ感謝され得るお仕事」(C)と表現するように、条件さえ整えれば多くの若者が魅力を感じる仕事である。しかし、その条件があまりにも整っていないことが背景にあって、教職から多くの若者が立ち去ってしまうのである。

たしかに、教職に戻る可能性も、少なくない。一定の「社会経験」を経て、教職に就きたいという伝統的な意識も若干であるが見られた。しかし、それが可能になるのも、やはり学びの空間として適切な人的条件が保障され、教員が疲弊させられるのではなくお互いの学びを保障し合えるような条件整備がなされることが必須条件となる。たとえば、Iは、自分に時間を使えて、子ども一人ひとりに時間を使えるようになれば教職に戻る可能性はある